

---

# 夕凧～私は君、君は私～

池魚籠鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕風〜私は君、君は私〜

### 【Nコード】

N4690D

### 【作者名】

池魚籠鳥

### 【あらすじ】

何もなくても、大切な何かがそこにはある。とある人の理想の二人の日常。

「  
私は君が好きだよ。」

「今日のお天気は快晴です。午前の降水確率は0%、午後も同じく雨は降らないでしょう。今日も元気にがんばりましょう。以上お天気でした。」

ブラウン管から流れるソプラノよりのいつもと同じ声、それといつもの時間。そして、愛しい彼女。変わらないし、変えたくもない彼女との日常は繭のようだ。繭のようだ、などという曖昧で抽象的な表現をしてしまうのは彼女の影響だ。どうしても彼女といると情緒

的或いは比喩的になってしまう。

「おはよ。」

そこが堪らなく愛しい。

「むう、おはよう！」

どうやら彼女はご立腹のようだ。ただそれすらもこの上なく尊いものだと感じてしまう。俺は狂っているのかもしれない。しかし、これ以上彼女を待たすのは忍びないので、早急に謝罪と挨拶をしよう。

「すまない、おはよう。」

「……それだけ？」

「それだけで満足しているだろ？」

言葉とは裏腹に、彼女の満足そうな含み笑いは緩慢の表情であった。太陽の陽射しは柔らかく二人を照らす。それから彼女は少しだけ顔を強張らせて、こう続けた。

「私は欲張りなの。」

彼女らしい言葉に俺は無意識に笑みをもらした。だから俺は、

「知ってるよ。」

と言った。そして彼女は俺がそう言うときぞ思っていたかのような顔をしていた。全く可愛いばかりだ。彼女は少し得意気な様子で何

かを言おうと口を開こうとしていた。だから俺は彼女の口を塞いでやった。

俺と彼女に名前はない。

生年月日も星座もない。

親も兄弟姉妹も恐らくないだろう。ないものはないで仕方がないと思う。俺はそう思うし、彼女もそう思っているはずだ。それでも虚しさや悲しさは然程ないから、毎日平和に過ごしている。奇妙な話だが俺と彼女は気が付いたら一緒にいた。つまり彼女が側にいると気付く前の記憶もないということになる。

俺と彼女には何もない。ただ唯一あるのはここに俺と彼女があるということ。さらにもう一つあるとしたら、俺と彼女の間にあるこの上ない愛情だけだ。それだけあればもう何もいらぬ。ただそう思えるようになったのは彼女の言葉があつたからだつた。

「私は君、君は私。」

「どついつ意味？」

「そのままの意味。もし、私が私を忘れそうな時は君が私を覚えておいて。君が君を忘れそうな時は私が君を覚えておくから。」

彼女の言葉はこの世のどんなものよりも魅力的だった。衝撃的感慨に更けているとさらに彼女は聖書のような言葉を続けた。

「私は君を忘れない。君は私を忘れない。ただそれだけ。簡単ですよ？」

「……………ああ。」

やっと振り絞って出た言葉はそれだけだった。それ程までに俺は溢れ出る喜びに身を震わせていた。それから先は無意識に近かった。彼女を抱き寄せ、目一杯抱き締めて、彼女を愛した。彼女は驚いた様子もなく俺に身を預けてくれた。少しだけ彼女の頬がいつもより赤かったような気がした。

それからというものの俺と彼女は穏やかに暮らしている。あちら側には干渉はせず、逆にあちら側からも干渉はされずに、なすがままに余談ではあるが彼女はより一層美しくなった。それに伴い俺にある一つの願望が芽生えた。が、もしかすると彼女に拒まれるかもしれない。それはそれで構わないのではあるが、俺にしてみればちょっと残念だ。という訳で彼女にお願いしてみた。

「…なあ。」

「何どうかした？」

「名前…付けてもいいか？」

俺は彼女に名前を付けてやりたい。

「名前？君が私に？」

「ああ。嫌か？」

「…うん、嫌。」

「そうか。」

彼女が嫌がることは極力したくはないけれど、やはり残念だ。だけれど彼女は俺を絶対に裏切らなかった。

「私だけに名前があるのは嫌。君にも名前がないなら名前なんていない。」

何もないことは別に悲しいことではない。何もなくてもこんなにも

美しく思える。

例えば、あの穏やかな夕風のように。

そつと唇を離すと彼女は名残惜しそうな顔をしていた。彼女の温もりがまだ微かに残っている内に彼女は話しかけて来た。

「ねえ風。」

「何だい夕？」

「さっき私が言い掛けた……。」「

「分かってるさ。」「

きっと彼女はいや、夕はこう言ったはずだ。

「私は君が大好きだよ。」

・  
・  
・  
f i n

(後書き)

ご了承ください。また何かしら書かせてもらいます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4690d/>

---

夕風～私は君、君は私～

2010年11月19日17時04分発行